パラグアイにおけるグアラニー語と先住民族

The Guarani Language and Indigenous Peoples in Paraguay

青木　芳夫*
Yoshio AOKI

I　はじめに－岐路に立つ「混血」社会－

パラグアイは、南アメリカ南東部に位置し、ブラジル・アルゼンチン・ボリビアと国境を接する内陸国である。約40万平方キロの国土には約480万の人々が生活しており、国土の中央を流れるラプラタ川の支流であるパラグアイ川の西部はチャコ地方と呼ばれて不毛の地帯が広がり、他方東部は森林地帯で、人口の大半がここに集中している。

パラグアイ社会は、今日人口の9割以上がグアラニー系の先住民族とスペイン系の白人との間の「混血」（メスティーソ）に分類され、南アメリカでもペルーやボリビアとも異なる、非常に同質的な「混血」社会として知られる。そのように評価される大きな理由の一つに、先住民系のグアラニー語とヨーロッパ系のスペイン語との二言語併用社会であることがあげられる。

歴史的に見れば、先スペイン期には、パラグアイのあたりには、トゥピ＝グアラニー人らが狩猟採集や焼畑移動農耕を営み、まだ首長国を形成するにはいたっていなかった。現在の首都アスンシオンは1537年に奥地探検の前哨基地として建設されるが、スペイン人征服者らの興味を引くような黄金郷は発見されることもなかった。先住民、特にグアラニー人に興味を抱いたのは対抗宗教改革を主導したイエズス会系の修道士たちであり、彼らをキリスト教化する手段として伝道村、いわゆるミッションを辺境各地に数十カ所建設し、さらにグアラニー語を活用しながら先住民族のキリスト教化につとめた。イエズス会自身は植民地末期の1767年にラプラタ地域から追放され、伝道村はやがて廃墟と化すこととなるが、パラグアイの文化的混血の基礎はこの時期に築かれた、といってよい。

しかし、パラグアイは、1811年の独立後も、波乱万丈を経験する。とくに、ブラジル・アルゼンチン・ウルグアイとの三国同盟戦争（1865－1870年）の敗戦では国土の半分と多数の人命を失い、国家社会そのものが存亡の危機に立たされた。また、20世紀には、チャコ地方をめぐって、同じ内陸国のボリビアとチャコ戦争（1932－1935年）を争い、消耗した。（その結果、現行の1992年憲法では、自衛以外の戦争の放棄が明記されている。）このような対外的な危機に直面

平成14年10月8日原稿受理　文学部

表1　南アメリカ諸国の人間的発展度

国	順　位	平均寿命（年）	成人識字率（%）	1人当たりGDP	人間的発展度
チ　リ	30(位)	75.1	95	9,129	0.891
アルゼンチン	36	72.4	96	8,937	0.884
ウルグアイ	37	72.6	97.1	6,752	0.883
ブラジル	68	66.4	82.7	5,362	0.783
パラグアイ	94	68.8	91.9	3,531	0.706
ボリビア	114	60.1	82.5	2,598	0.589

（出典）Borda & Masi 1998: 49
ちなみに、第1位はカナダで、最下位は175位のシエラレオネであった。

するたびに、小国となったパラグアイは、自らのアイデンティティの基軸をグアラニー語やグアラニー文化に求めざるを得なかった、といえる。そういう意味では、「混血」社会パラグアイというものは、対外向けにやむをえず「発明」されたという一面がある[1]。

一方、今日のパラグアイは、1989年には35年に及んだストロエスネル独裁政権のくびきから一応脱して、民主化に向けて努力している。しかしながら、社会経済的な停滞、政治改革の遅れ、市民社会の未成熟、メルコスール（南アメリカ南部共同市場）の期待はずれ、などにより、いまも苦闘が続く［Borda & Masi 1998］。たとえば、国連の人間的発展度を指標にとれば、表1のような結果となり、他のメルコスール加盟国の実績には遠く及ばず、むしろボリビアに近い。国内の民主化のためにも、パラグアイは岐路に立たされているのである。本稿では、このようなパラグアイの直面する課題を、グアラニー語と先住民族の関係を軸にして考察したい。

なお、巻末に、グアラニー語の用語集を添付した（資料3）。

Ⅱ　パラグアイにおけるグアラニー語と二言語教育

まず、パラグアイにおける言語状況を国勢調査で確認しておこう。

表2のとおり、1992年においても、グアラニー語の常用者は、モノリンガルとバイリンガルを加えるとパラグアイの全人口の88%以上にのぼり、圧倒的に多い。さらに、将来的にもグアラニー語モノリンガルの減少（長期予測によれば、2030年32%、2070年25%、2110年20%）は

表2　国勢調査にみる常用語別人口の分布

年	総人口	スペイン語	グアラニー語	二言語
1950	1,119,371(人)	4.7（%）	40.1（%）	53.8（%）
1962	1,634,687	4.4	45.1	48.4
1982	－－	6.5	40.1	48.6
1992	4,152,588	6.4	39.3	49.0

（出典）Corvalán 1998: 22
1982年については、他の文献から補った。

仕方ないにしても、グアラニー語話者（バイリンガルは、それぞれ55%、60%、65%に増加する、と予測される）の比率は非常に安定している。このことは、ペルー［青木 2002: 79］やボリビアにおけるケチュア語の現状や未来と比較してもいえることである。

このような広範な話者の存在自体、ラテンアメリカの先住民言語にとって例外的な現象であるが、それ以外にもペルーやボリビアでは経験しなかったような現象をパラグアイでは経験することが出来る。

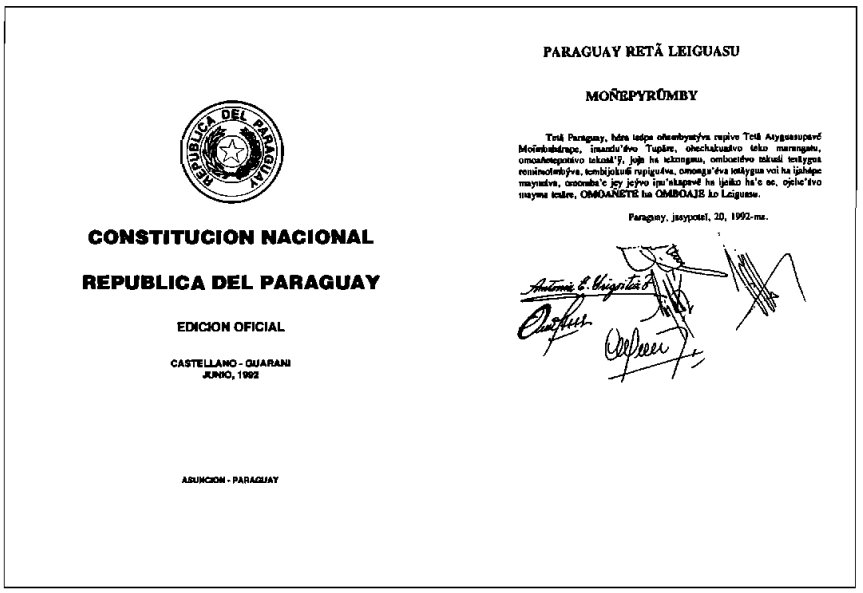
資料1　1000グアラニー紙幣
（裏面にグアラニー語による数の表記）

第1に、今日、パラグアイの通貨の裏にはグアラニー語の数詞が印刷されていることである（資料1参照）。これが始まるのは1979年といわれている［Corvalán 1985］。通貨の単位に先住民言語の語彙から選ばれるのは、ペルーの場合でもケチュア語から「インティ」（太陽の意味。現在では太陽を意味するスペイン語の「ソル」に戻っている。）が採用されたことがあるが、ケチュア語の数詞が通貨に印刷されたことはなかった。ちなみに、パラグアイの通貨の単位が「グアラニー」と呼ばれるようになるのは、1940年代のことである。

第2に、マスメディアの面では、ペルーやボリビアと同じように、ラジオ放送（特にFM放送を中心に）では、グアラニー語を使用したチャンネルや番組は数多い。しかし、それ以外でも、今日のパラグアイでは、テレビ（第9チャンネル）でも、早朝5時からのフォルクローレの番組に続いて、5時半から30分間グアラニー語によるモーニング・ショー的な番組が放送されている。これが終わると、引き続きスペイン語による長めのモーニング・ショーとなる。ただし、ラテンアメリカでは、この程度でも、スペイン語やポルトガル語以外の先住民言語によるテレビ番組、特にニュース番組は非常に珍しいのである。（ペルーの場合、いわゆるベラスコ左派軍事政権によってケチュア語が公用語とされた時期に、一定の割合の番組をケチュア語によって制作するように指示されたが、実際にどの程度制作されたのか、筆者自身は知らない。昨年、国営放送によるルポルタージュ番組では先住民言語の部分についてスペイン語の字幕が出ていた。）

その他、首都アスンシオンの一般書店では、グアラニー語の辞書やテキストなどが普通に市販されていたことや、パラグアイで開催された1999年のアメリカ杯サッカーではステッカーがスペイン語とグアラニー語の二言語表記だったことが、まだ記憶に新しい。また、現行の1992年憲法については、スペイン語とグアラニー語による二言語併用版が制作された（資料2参

資料２　1992年憲法　（左）二言語版表紙　（右）グアラニー語による前文



CONSTITUCION NACIONAL

REPUBLICA DEL PARAGUAY

EDICION OFICIAL

CASTELLANO - GUARANI
JUNIO, 1992

ASUNCION - PARAGUAY

PARAGUAY RETÃ LEIGUASU

MOÑEPYRÛMBY

Tetã Paraguay, hára ñaipa ohaenbyasyva rupive Tetã Asyguasupavé Moñembidrape, ituandu'ávo Tupãre, ohechakuaáivo teko marangatu, omoañetepotávo tekoaé'ỹ, joja ha ñeñongatu, omboeréivo ñakuãi teãỹgua reminotenbýva, tembijokuãi rupigudva, omonga'éva tetãygua voi ha ijahápe mayuãva, omomba'e jey je-jévo ipu'akapavé ha ijaiko ha'e ae, ojeko'ávo mayma teãre, OMÑOAÑETÉ ha OMBOAJE ko Leiguasu.

Paraguay, jasypoteĩ, 20, 1992-ma.

照)。

以上のような筆者の印象を、憲法や二言語教育の変遷から裏付けておこう。

グアラニー語は、ラテンアメリカの他の先住民言語と同じように、長い間、話し言葉（音声言語）として存在してきた。植民地期・独立期をつうじて、公的には、スペイン語が書き言葉でありつづけた。

ストロエスネル政権期の1967年に制定された憲法は、「共和国の国家語は、スペイン語とグアラニー語である。公用語はスペイン語である」（第５条）、と規定した。また、第92条では、「（前略）国家はグアラニー語を保護し、その教育・発展・洗練を推進しよう」とも規定した。グアラニー語がようやく、憲法上でも国家の象徴の一端を担うようになり、やがて通貨の裏面にグアラニー語による数詞の表記が実現することとなる。

1957年に採択されたＩＬＯ第107号条約（独立国における先住民ならびに他の種族民および半種族民の保護および統合に関する条約）を、パラグアイは1969年に批准している。

同条約では、母語による識字化が求められながら、他方母語から国家語ないし公用語へ漸進的に移行すべきであることが、同時に規定されていた。

その結果、1973年には、パラグアイでもようやく二言語教育の実験が初等教育で始まり、それまで教室での使用を禁止されてきたグアラニー語の使用が公認されるようになるが、この時期の二言語教育は、パラグアイにおいても、他のラテンアメリカ諸国におけると同様に、スペイン語化のための移行型の二言語教育にすぎなかった。実際、４年次からはスペイン語でのみ教育することを前提としていた。それまで原則的には教室でのグアラニー語の使用が低学年では許可されるようになった点が評価できるものの、例えば1981年の規定では、「第一サイクル［初等教育最初の３年間］では、スペイン語とグアラニー語が口頭コミュニケーション（聞き

取りと話し方）のために使用されるが、読み書きのためにはスペイン語のみを使用する」となっており、グアラニー語はまだ話し言葉として認められただけでスペイン語化のための補助言語にすぎなかった。この移行型の二言語教育は、パラグアイでも、結局失敗に終わった。

そしてようやく、ストロエスネル政権倒壊後に制定された、現行の1992年憲法は、言語について第140条において「パラグアイは複数文化・二言語併用の国である。スペイン語とグアラニー語が公用語である。両言語の利用形態は法が規定する。先住民族言語は、他の少数民族言語と同じように、国民の文化遺産の一部を形成する。」と規定しており、教育との関連では第77条において、「学齢初期の教育は生徒の公用母語によって行われる。また、共和国の両公用語の理解と利用によって教育される。母語がグアラニー語ではない少数民族の場合には、二つの公用語から一つを選択することが出来る。」と規定するようになった。また、1989年の新しいＩＬＯ第169号条約（独立国における先住民および種族民に関する条約）には、1993年に、パラグアイは批准している[2)]。同条約では、母語による識字化に加えて、国家語もしくは公用語で流暢に会話できるようになる機会の提供が義務付けられている。

その結果、1994年からは移行型に代わって維持型の二言語教育、あるいは二言語＝異文化間教育が実施されるようになる。教育一般法は、第31条において「教育は、学齢の初期つまり第一学年から生徒の母語である公用語によって実施される。もう一つの公用語もまた、学校教育の始まりから第二言語としての教授法により教育される。」と規定しており、 スペイン語を母語とする児童向け（グアラニー語が第二言語となる）と、グアラニー語を母語とする児童向け（スペイン語が第二言語となる）の２種類の、維持型の二言語教育が実施されるようになった。なお、日本の中等教育に当たる第三サイクルの説明によれば、第三サイクルでは、第一言語、第二言語の区別もなくなる。教授言語としての両者の役割分担は、算数（８対２）、自然科学および保健（６対４）、労働および技術（６対４）を除けば、「言語・文化」・「社会科学」「倫理・公民」・「美術」・「体育」の科目では半々である。ただし、スペイン語には、「社会文化的統合やコミュニケーションのための道具」としてだけでなく、「科学的、普遍的な現象にアクセスする道具」となることが期待されている［Bareiro 1998］。維持型の二言語教育はまだ始まったばかりではあるが、評判は良好のようである。

また、南アメリカ南部では共同市場メルコスールのことを無視できないが、グアラニー語はメルコスールの「歴史的言語」に認定されている。

なお、グアラニー語と一口に言っても、じつはさまざまなグアラニー語がある。もっとも代表的なものは「ジョパラー jopara」と呼ばれ、今日とくに都市部を中心に日常会話で話されるグアラニー語である。これはスペイン語とグアラニー語が混交したもので、一種のクレオール・グアラニー語と呼べるようなものであろう。「混血」を軸にパラグアイ社会が称揚されていた時代には、二言語教育にもこのような「現実」に即してジョパラー・グアラニー語を採用するようにという意見を専門家も述べていたが［Corvalán 1985］、今日の維持型の二言語教育では、ジョパラーではなく、「科学的」グアラニー語とか、「学校」グアラニー語とか、呼ばれるような、モノリンガルのグアラニー語が、特に読み書き用のグアラニー語の基準に利用され

ている。

しかし、グアラニー語が大多数のパラグアイ人によってスペイン語と並んで日常会話で使用され、二言語教育もまた順調に発展してきているとはいえ、まったく問題がないわけではない。以下で、考察することにしよう。

Ⅲ　パラグアイの先住民族の現状ー「見えない存在」ー

パラグアイを紹介した興味深い著作『南米のパラダイス・パラグアイに住む』(田中裕一)でも、パラグアイの先住民族については「インディオの土産物売り」という項目のなかで、次のようにしか言及されていない。

「(前略) パラグアイでは，現在は昔ながらの生活を続けているインディオは奥地にほんの一部残っているだけで，政府の保護を受けています。やがては一般のパラグアイの人達と同化して消えていくのかもしれません。(後略)」[田中　1999：221 - 223]

しかし、このような認識にも無理からぬ点がある。パラグアイ政府自身、近年まで「先住民族」の存在を認知してこなかった経緯があるからである。

具体的な数値から紹介していこう。表3は、1994年現在の米州の先住民族人口を国別に百分比の高い順番に並べたものである。ボリビア・グアテマラ・ペルー・エクアドルのように、上位には先スペイン期に農耕を中心に高度文明が発達した地域が並ぶ。南アメリカ南部に注目すると、チリ・アルゼンチンのほうが人数・百分比の点で興味を引く。ケチュア系・マヤ系・アイマラ系・ナワトル系に次ぐ米州第五位のマプーチェ系の民族集団（母語からみた）が同地域で暮らしているからである。また、ブラジル・アマゾン地域の先住民族が、地球環境問題への関心の高まりとともに、世界的な注目を浴

表3　米州の先住民族

No.	国	総人口	先住民族	%
1	ボリビア	8,200,000	4,142,187	50.51
2	グアテマラ	10,300,000	4,945,511	48.01
3	ペルー	22,900,000	8,793,298	38.39
4	エクアドル	10,600,000	2,634,494	24.85
5	ベリース	200,000	27,300	13.65
6	ホンジュラス	5,300,000	630,000	11.88
7	メキシコ	91,800,000	8,701,688	9.47
8	パナマ	2,500,000	194,719	7.78
9	ニカラグア	4,300,000	326,600	7.59
10	チリ	14,000,000	989,745	7.06
11	ガイアナ	806,000	45,500	5.64
12	仏領ギアナ	104,000	4,100	3.94
13	カナダ	29,100,000	1,045,885	3.59
14	スリナム	437,000	14,600	3.34
15	パラグアイ	4,800,000	94,456	1.96
16	コロンビア	35,600,000	620,052	1.74
17	エルサルバドル	5,200,000	88,000	1.69
18	ベネズエラ	21,300,000	315,815	1.48
19	アルゼンチン	33,900,000	372,996	1.10
20	コスタリカ	3,200,000	24,300	0.75
21	米国	260,800,000	1,959,234	0.75
22	ブラジル	155,300,000	254,453	0.16
	全体	720,647,000	36,224,933	5.03

(出典) Matos Mar 1993: 232

びるようになってきたことは周知のとおりである。それに対して、世界複合遺産のひとつ、イグアス公園付近でアルゼンチンやブラジルと国境を接するパラグアイの先住民族は10万人弱、2パーセント弱にすぎず、ほとんど注目も浴びてこなかった。

同表を作成したペルーの人類学者ホセ・マトス＝マールは、パラグアイ国民の9割以上が先住民言語（グアラニー語）を話し、グアラニー語がヨーロッパ系の公用語（スペイン語）と同一の地位を有し、さらに家庭内言語や話し言葉としてはスペイン語を上回っているにもかかわらず、10万弱の先住民族の現状が他の米州諸国の先住民族の現状と大差ないことに驚きを隠せなかった［Matos Mar 1993: 164］。

また、言語学者であり人類学者である細川弘明は、次のように断定している。「ワラニー語は、今日では、いわば非インディオ系住民が『パラグアイ人』としての独自性を表現する媒体として用いられているわけである。この意味において、現代ワラニー語は、『白人の言語』である。」［細川　1992：1141］細川と同意見の例に、エステル・プリエトがおり、彼は次のように記している。「グアラニー語が常用語であるという事実は、パラグアイのメスティーソがグアラニー系の先住民族と自己同定していることを意味しない。グアラニー語はパラグアイ国民の社会的・文化的な形成において直接の先駆として認知されてはいるものの、普通の市民は自分が先住民とみなされたいとは毛頭望んではいない。」［Prieto 1994: 236］

表4　パラグアイの先住民族

語　　族	民　族　集　団	推定人口
zamuco	ayoreo (maro, ayoweo)	2,015（人）
〃	ishir (chamacoco)	1,400
mataco (mataguayo)	nivaclé (chulupí)	14,000
〃	maká	1,120
〃	manjui (choroti)	520
maskoy	enlhet (enxet, enlhit, lengua)	14,200
〃	guaná	500
〃	sanapaná	1,850
〃	argaité	2,200
〃	toba maskoy	2,650
guaicurú	qom lik (toba qom)	1,020
guaraní	guaraní occidentales (guarayo, chiriguano)	2,100
〃	guaraní ñandéva (tapieté)	1,990
西部地域（チャコ）　小計		45,565
guaraní	paĩ tavyterã	9,500
〃	mbyá	12,100
〃	avá guaraní (chiripá, avá katu eté)	9,450
〃	aché (guayakí)	960
東部地域　　小計		32,010
総　　計		77,555

（出典）Zanardini & Biedermann 2001: 11
ただし、民族集団の名称は、国勢調査のものとは異なっている。

パラグアイの先住民族は、５つの語族と17の民族集団から構成されている。2001年にパラグアイから刊行され、現在パラグアイの先住民族をもっとも網羅的に紹介した著作に掲載されていた表４は、その内訳を示している。また、それによれば、先住民族の人数は８万人弱と推定されている。

1992年８月26日に、人口ならびに住居について、国勢調査が実施された。それによれば、パラグアイの全人口は415万2588名であり、そのうち４万9487名（1.19%）が先住民族であった。その結果から、パラグアイの先住民族の一般的特徴について以下のようにまとめることができる［Melià 1997: 405-408］。

- 大半が、農村部に居住している。
- 大半が、500人未満の集落に居住している。
- 言語はほとんど先住民言語であり、二言語併用のばあいでも、母語以外の先住民言語を選択する。
- 公教育の修了は37%以下と非常に低く、初等教育の最初の３年間で終わるのが普通である。
- 絶滅どころか、復活しつつある。先住民女性の出生率は、農村部女性全体のそれよりも高い。ただし、幼児死亡率は高い。
- 大半は、一次産業部門の自営労働者のままである。自営業者はいない。
- 住居、道具、その他の日常生活要素は、伝統的なままである。ただし、使用材料はすでに近代化されている。
- 要するに、ランチョと呼ばれる掘立て小屋に住み、周辺の環境が提供してくれる資源から、自らの生活様式を維持するのに適した手段を獲得している。

表５　ラテンアメリカ諸国の非識字率

国	1970年代		1980年代	
	非先住民系	先住民系	非先住民系	先住民系
ボリビア	23（%）	42（%）	14（%）	24（%）
コロンビア	21	46	16	45
グアテマラ	46	87	40	79
パナマ	21	−	14	62
パラグアイ	20	−	13	70
ペルー	30	50	−	−

（出典）Lisbeth G. 1996: 35

パラグアイの先住民族を非先住民族と比較できるようなデータはほとんどない。表５は、世界銀行グループによる調査研究によるものである（ただし、パラグアイを直接調査対象とするものではない）。同表によれば、1980年代におけるパラグアイの先住民族の非識字率は70%と、グアテマラに次いで高く、非先住民族との格差は57ポイントで、最高となっている。このことからは、非先住民族と比較して、パラグアイの先住民族が置かれている劣悪な言語文化的・社会経済的・政治的な状況を想像することが出来よう。

前掲の『パラグアイの先住民族』によれば、歴史的にみれば、パラグアイの独立以後に限定しても、1848年、カルロス・アントニオ・ロペス大統領は、先住民族から土地と財産を没収した。以後、先住民族は、社会的劣位にとどめおかれ、父祖の土地に対する回復すら阻止されてきた。19世紀末以来宗教団体から提供された、ややもすれば温情主義的な支援を別とすれば，20世紀の後半になってようやく先住民族復権運動が台頭し、1981年には法令第904号が公布される。先住民共同体法である。農地改革らしい改革が実施されたことのないパラグアイであるが、これにより、先住民族は、伝統的な領土の返還を合法的に請求することが出来るようになったのである。

パラグアイは1989年のＩＬＯ先住民条約を批准した数少ない国の一つである。

そして、1992年に制定された新憲法には、先住民族についての章が設けられている。6条から構成されたこの章の内容は以下のとおりである。

- パラグアイ国家の形成・組織以前の諸文化集団と定義されるところの先住民族の存在を承認すること。(第62条)
- それぞれの居住地において、自らの民族的アイデンティティを保持・発展させる先住民族の権利を承認・保障すること。(第63条)
- 先住民族は、かれら特有の生活形態の保持・発展のために十分な質と面積の土地を共有する権利を有する。明白な同意なしの居住地の移転は禁止する（第64条）
- 自らの慣習、この憲法、国法にしたがって、国の経済的・社会的・政治的・文化的な生活に参加する権利を、先住民族に保障する。(第65条)
- 国家は、特に公教育に関して、先住民族の文化的特質を尊重する。人口の減少、居住地の強奪、環境の汚染、経済的搾取、文化的疎外に対する彼らの防衛に留意する。(第66条)
- 市民的であれ軍事的であれ、社会的な奉仕から免除する。(第67条)

この憲法制定により、パラグアイの先住民族ははじめて自らの存在がパラグアイ社会から認知された。新憲法制定からすでに10年間が経過した。その間の進展には見るべきものはまだほとんどないとはいえ、パラグアイの憲法が非常に進歩的な先住民族規定を有していることは、評価することが出来る。

また、従来教会と軍隊以外、ほとんどかかわりがなく、アパシーに陥っていた先住民族の人々の間にも、土地の回復と文化的アイデンティティを軸にして、急速に意識化が高まってきている。2000年10月12日には、パラグアイの先住民族によるはじめての政治団体、Movimiento Indígena 19 de Abril（「4月19日先住民運動」）が誕生した［Colmán G. 2000: 11-13］。

Ⅳ　グアラニー語のアンビヴァレントな現状

パラグアイ研究の専門家田島久歳は、次のように指摘したことがある。「パラグァイを中心とするグァラニー語文化圏ともいえる地域では、一般に言語学でいうバイリンガル社会で起こ

るとされる『上位』の言語と『下位』の言語の関係がほとんどみられなかった。しかもグァラニー語がスペイン語とは言語体系から見てかなり異質な言語であるにもかかわらず、そうなのである。」[田島　1996：14 - 15]

田島だけではなく、パラグアイの研究者も、例えばマルコス・モリニゴは、「周知のように、パラグアイはラテンアメリカ諸国の中で真に唯一の二言語国家であり、いまなお躍動的で創造的な先住民言語が多くの住民によって話される一般言語の地位をスペイン語と共有し、先住民言語を日常的ないし優先的に話しても社会的身分の低下を意味しない唯一の国である。」と記している [Morínigo 1982: 597]。

しかしながら、田島やモリニゴの指摘するように、グアラニー語とスペイン語との間には実質的な格差は存在しないのであろうか。すでにⅢ章では、グアラニー語はもはや先住民族の言語ではないとするマトス＝マールや細川の辛らつな指摘があった。グアラニー語とスペイン語との間にも、それほどまでででないにせよ、同じような関係を指摘できるのではないであろうか。

パラグアイの二言語併用教育の専門家グラシエラ・コルバランは、1980年代のことではあるが、一方ではパラグアイの特徴として、「いくつかの移民人口の地域と、少数の孤立した先住民人口の地域を例外として、エスニック的にも文化的にも同質的な人口による二言語併用国家」である点をあげながら、他方では二言語教育の現場における混乱、言行の不一致を指摘せざるを得なかった [Corvalán 1985: 40, 90]。

また、グアラニー語とスペイン語との間には、バイリンガル層の間で微妙な使い分けのあることが指摘されている。例えば、グアラニー語が愛情やユーモアや皮肉のような感情を表現する手段に対して、スペイン語は公的でフォーマルなコミュニケーションの時の言語である、といわれる [CNB 1997:26]。

また、コルバランによれば、国家や政府は公式のコミュニケでは口頭でも文書でも必ずスペイン語を使用し、司法でもスペイン語が使用される。グアラニー語は専門的な使用目的のためにはまだ十分洗練されていないからだとされる。他方、選挙キャンペーンや政治演説ではグアラニー語を好んで使いたがる、という [CNB 1997:40-41]。

パラグアイの全国二言語主義委員会（CNB）自身、バイリンガル層だけでなく、スペイン語モノリンガルもまた、つぎのような偏見も持っている、と指摘している。ⓐグアラニー語は私たちの言語である。ⓑしかし、私たちにはグアラニー語はうまくしゃべれない。ⓒスペイン語の習得と使用（少なくともパラグアイ的なスペイン語であっても）は学校教育などの必要条件である。グアラニー語には近代的生活に必要な語彙が不足しているから。ⓓしかもグアラニー語は社会的にも経済的にも進歩のための手段ではない [CNB 1997:66]。

この点に関連して1996年にナショナル・アイデンティティについて3種類のアンケート調査がアニャスコとデンディアによって実施されているので、その結果を一部紹介しておきたい [Añazco & Dendia 1997][3)]。

そのうち、中等学校の第五学年（都市部と農村部）を対象にした彼らの調査項目は、以下のとおりであった。①私たちパラグアイ人は、アイデンティティ感情を抱いている。②パラグア

イ人としてのあなたのアイデンティティ感情は定着している。③あなたの先祖（生物学的・文化的な）はグアラニー人でありスペイン人であった。あなたの現在のありようにどの程度反映しているか。④パラグアイ人としてのあなたのアイデンティティ感情の形成に寄与したものは、家族、友人、その他の機関？⑤音楽・食事・慣習・伝統・国家の象徴の意味合い。⑥パラグアイの風景（河川・太陽・森林など）の意味合い。⑦学校教育とパラグアイ・アイデンティティの関連。⑧グアラニー語の常用はパラグアイ人としてのアイデンティティ感情の形成を助けるか？⑨あなたは、日常的な関係の中でグアラニー語を使用しているか？⑩生活体験としての神は、ナショナル・アイデンティティの重要な要素であるか？⑪学校を通して行われるフォルクローレはあなたにとって有益か？

- ①の結果からは、パラグアイにおいてはアイデンティティ感情が確立されているとする回答が大半で、未確立とするものは、都市部13%、農村部５%にすぎなかった。
- ⑧の結果からは、グアラニー語話者であろうとなかろうと、「パラグアイ人であること」と「グアラニー語を話すこと」が同義であるとするものが大半であることが分かった。（都市部の85%、農村部の90%が「はい」と回答した。）
- しかし、⑨の結果からは、グアラニー語の常用度には都市部と農村部では大きな差があることが分かった。つまり、「おおいに」と回答したものは都市部の10%に対して農村部では62.5%、「全然」と回答したものが都市部の50%に対して農村部では2.5%であった。
- また、③の結果からも、表６のように、都市部と農村部とでは大きな差が出ている。都市部では52.5%のものが自分たちの文化の中にあるはずのグアラニー系の要素を否定する結果となった。

このような結果を踏まえ、アニャスコとデンディアは、パラグアイの場合、「感情」レベルのナショナル・アイデンティティは十分であるが、「認識」レベルのアイデンティティは未確立である、と指摘している。

以上のような数量的な心理分析はまだ始まったばかりであり、常用語と社会経済的格差との関連についての研究もまた、まだほとんどない。

ある研究者（Shaw N. Gynan）によれば、スペイン語モノリンガルの家庭の92%はレンガ造りの家に住むが、グアラニー語モノリンガルは67%である。後者の32%は掘立て小屋で暮らす。また、貧困な住環境に甘んじるグアラニー語モノリンガルはスペイン語モノリンガルの２倍であるという［CNB 1997:25-26］。

表６　グアラニー系文化とスペイン系文化の影響

	グアラニー系の影響		スペイン系の影響	
	都　市	農　村	都　市	農　村
大いに	15（%）	50（%）	32.5（%）	55（%）
少し	30	47.5	50	45
なし	52.5	2.5	−	−
無回答	2.5	−	17.5	−

（出典）Añazco & Dendia 1997

表7　教育を軸とした構造的制約条件

		出生率	失業率	所得		
				な し	最低賃金以下	計
全国平均		4.6(人)	30.2(%)	37.3(%)	31.9(%)	69.2(%)
絶対的非識字層						
全　国	277,136(人)	6.1	45.6			
首　都	14,016	4.0	62.4	46.1	47.3	93.4
都　市	88,862		55.6	44.9	48.0	92.9
農　村	188,274	6.5	39.7			
男　性	119,279		32.5	37.2	52.3	89.5
女　性	157,857	6.1	52.9	48.4	46.1	94.5
機能的非識字層						
全　国	883,971	6.1	36.0			
首　都	47,310	4.0	50.9	51.5	34.6	86.1
都　市	299,748		48.4	50.2	38.2	88.4
農　村	584,223	6.5	29.1			
男　性	427,722		26.4	39.9	42.4	82.3
女　性	456,249	6.1	46.1	59.3	34.0	93.3
調　査　年	〔1992年〕	〔1992年〕	〔1995年〕	〔1994年〕		

（出典）Céspedes R. 1996: 20
ただし論文の内容から数字の一部を補った。

またセスペデスは、1995年頃の貴重なデータを提供してくれる（表7参照）。彼は、「絶対的非識字層 analfabeto absoluto」と「機能的非識字層 analfabeto funcional」に分けて学歴を軸に民主化への社会的構造的制約条件を考察しようとする。ここで、前者は、小学1年しか修了していない者を、後者は小学3年まで修了した者を、それぞれ指している。また、言語的には、著者はその根拠を明示していないが、前者はグアラニー語モノリンガル、後者はグアラニー語が優勢な層と措定している。数的には、前者には10人に1人が、後者には10人に3人が、それぞれ該当する。失業率は全国平均（30.2%）をはるかに超え、収入が最低賃金を下回る者は9割前後（全国平均69.2%）である。なんともすさまじい数字である。その結果、彼らは、就業機会に恵まれず、インフォーマル部門に帰属し正規の賃労働者でないために社会保険制度からも排除され、また最低賃金以上の所得があることを受給資格とするＣＯＮＡＶＩによる公共住宅援助をも受けられない。現代の情報社会の中にあってラジオやテレビはスペイン語放送が圧倒的に多く、疎外を強いられている。また、両者の間の格差はあまり開いておらず、したがって、社会的上昇のためには、スペイン語の読み書き能力を身につけるしかない人々なのである［Céspedes R 1996: 16-20］。

以上のとおり、グアラニー語話者が圧倒的に多く、同質的な「混血」社会とみなされがちだったパラグアイ社会もまた、仔細に考察すれば、他のラテンアメリカ社会と同様に、常用語の相違が社会経済的格差と相関関係にあること、また一概には、同質的な「混血」社会と見なしえないことが分かった。この課題をどのように克服すべきなのか、それは単にパラグアイのみの課題ではないであろう。

V　おわりに

パラグアイ社会は、現在、自らのナショナル・アイデンティティの基軸を「混血」から「インターカルチュラル」（文化の相互尊重。ボリビアのアルボは次のように述べている。「二文化であるとか複数文化であるとか－例えば二言語であるとか複数文化であるとかのように－だけではまだ、インターカルチュラルであるとはいえない。…『他者』を差異ある者と認めておきながら受け入れないようなものは、マイナスのインターカルチュラルと呼ぶことにしよう。…プラスのインターカルチュラルでは他者は差異ある者として受け入れられる。」［Albó 2000: 18-19］）へと転換するという課題に直面しており、また、その転換のためには、これまで「見えない存在」にすぎなかった先住民族をも積極的にその視野の中に入れていかなければならないのである。

［後記］　本稿は、2001年度奈良大学研究助成による成果の一端である。

注

1）ある研究者は、パラグアイにおけるナショナル・アイデンティティの形成について、次のように時期区分している［Añazco & Dendia 1997］。
- 1537年から1810年までの植民地期は、ヨーロッパ人による征服・植民に対抗するグアラニー人による抵抗と解体の時期である。この舞台の中から、メスティーソが、対立する諸要素を総合するものとして誕生する。
- 1811年から1840年までの独立初期には、外圧に対抗する形でアイデンティティ感情が強化された。一つの民族が実在すると意識されるようになり、その法人化のために、パラグアイ国家が誕生する。
- 1841年から1870年までの時期には、社会経済的ブームが到来する一方、諸外国による攻撃（三国同盟戦争）の前に敗れた。愛国感情が高揚し、激しく抵抗した。解体されそうになるが、抵抗の意志は放棄できなかった。
- 1870年から1935年までの時期には、敗戦から徐々に復興し、思想的には実証主義が優勢となる。新たな対外戦争（チャコ戦争）もあり、アイデンティティ感情が再確認された。
- 1935年から1953年までの時期には、第二次世界大戦前には自由主義が衰退したが、戦後には、民主主義の復権が試みられたが、失敗に終わった。
- 1954年から1989年までの時期はストロエスネル政権による全体主義の時代である。民族文化が解体されようとしたが、阻止された。
- 1989年から1997年までの時期は民主主義への移行の段階にあたる。アイデンティティは強化され、社会文化的帰属の意識は徐々に深まってきている。自己尊重が回復してきている。

2）同条約の批准国は現在17カ国に達しており、ラテンアメリカ諸国は、従来のアルゼンチン・ボリビア・コロンビア・コスタリカ・エクアドル・グアテマラ・ホンジュラス・メキシコ・パラグアイ・ペルーに加えて、今年ブラジル・ドミニカ・ベネズエラが新たに批准した。（ＩＬＯホームページによる）

3）その他、２人が収集した意見には次のようなものがある。
- アノミーの一例がグアラニー語である。グアラニー語は憲法によって承認され、国民感情の真の

エンジンであるにもかかわらず、今日でも、スペイン語と同じだけの社会的承認をえるにはいたっていない。(ラモン・フォヘル、社会学者)

- 混血概念はアイデンティティに非常に悪い影響を及ぼしてきた。パラグアイ人は、数的には生物学的混血はけっして決定的でなかったにもかかわらず、自分たちはメスティーソである、といわれてきた。混血概念はむしろ、インディオに対する過小評価によって染め上げられてきた。「インディオ」と同一視されたいようなものは、誰一人いなかった。植民者たちはインディオのことを、汚いとか，怠け者とか、愚かとか，未洗者だとか、決め付けてきたのだから。(バルトロメウ・メリア、人類学者)
- グアラニー語は話し言葉であり、パラグアイ人の間のコミュニケーションを滑らかにする。スペイン語の影響のほうが、私たちの言語的融合では重要であった。グアラニー語だけだったなら、今なお私たちは野蛮だったであろう。(警官)
- グアラニー語は、システムにとっては問題であろうが、民衆にとっては問題ではない。(パイロット)
- 明らかにグアラニー文化にある。パラグアイ人は、自分たちの基盤は先住民世界にあることを認めている。ただし、先住民世界は今日ではすでにバラバラで、未来にとっても非常に過小評価されている。なぜなら、先住民であることはけっして儲けを生むような資本ではなく、発展からも「切り離されて」いるからだ。農民は、今や、先住民の生活様式はすばらしいことはすばらしいが、このまま生活することは出来ない、と考えている。(農民組織顧問、大学教授)

[参考文献]

青木　芳夫

2002年　「ラテンアメリカにおける先住民言語とアイデンティティ－ペルーを中心に－」『奈良大学紀要』第30号

田島　久歳

1996年　「グァラニー語・スペイン語バイリンガル社会の形成」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第３号

田中　裕一

1999年　『南米のパラダイス・パラグアイに住む』(アゴスト)

細川　弘明

1992年　「ワラニー語」亀井孝ほか編『言語学大辞典』第４巻（三省堂）

Albó, Xavier

2000　"Identidad, cultura y lengua", *ACCION,* No. 210.

Añazco, Celsa, & Rosalba Dendia

1997　*Identidad Nacional: Aportes para una reforma educativa,* CIDSEP.

Bareiro de Soto, Maria Celsa

1998　*Programa de estudio: Séptimo grado-educación escolar básica. Historia y geografia.*

Borda, Dionisio, & Fernando Masi

1998　*Los límites de la transición: Economía y Estado en el Paraguay en los años 90,* CIDSEP.

Céspedes R., Roberto L.

1996　"Restricciones a la calidad de la democracia", *ACCION,* No. 170.

Colmán Gutiérrez, Andrés

2000　"Movimiento Indígena 19 de Abril: Política con Mirada aborigen", *ACCION,* No. 209.

Comisión Nacional Bilingüismo

1997　*Ñane ñe'ë Paraguái Bilingüe: Políticas lingüísticas y educación bilingüe,* Fundación en Alianza.

Corvalán, Graziella

1985　*Lengua y educación: un desafio nacional,* Centro Paraguayo de Estudios Sociológicos.

1998　*¿ Qué es bilingüísmo en el Paraguay?,* 2a. ed., Centro Paraguayo de Estudios Sociológicos.

Krivoshein de Canese, Nataria, & Feliciano Acosta Alcaraz
1999 *Ñe'êryru avañe'ê-karaiñe'ê karaiñe'ê-avañe'ê,* Colección Ñemityý.
Lisbeth Gonzalez, Mary
1996 'How Many Indigenous People?', George Psacharopoulos & Harry Anthony Patrinos, eds., *Indigenous People and Poverty in Latin America,* Avebury.
Matos Mar, José
1993 "Población y grupos étnicos de América, 1994", *América Indígena,* vol. 53, no. 4.
Melià, Bartomeu
1997 *Pueblos indígenas en el Paraguay: Demografía histórica y análisis de los resultados del Censo Nacional de Población y Viviendas, 1992,* Fernando de la Mora.
Morínigo, Marcos
1982 "Impacto del español sobre el guaraní", Grazziella Corvalán & German de Granda, comp., *Sociedad y Lengua: Bilingüe en el Paraguay,* Tomo Ⅱ, Centro Paraguayo de Estudios Sociológicos.
Prieto, Esther
1994 'Indigenous Peoples in Paraguay', Donna Lee Van Cott, ed., *Indigenous Peoples and Democracy in Latin America,* Macmillan.
Zanardini, José, & Walter Biedermann
2001 *Los indígenas del Paraguay,* CEADUC.

資料3　グアラニー語用語集

日　本　語	グアラニー語	スペイン語
A　挨拶		
はい	ha'e, heẽ	sí
いいえ	nahániri, anichéne	no
どうぞ（お願いします）	che pytývo mina, mína	por favor
おはよう	mba'éichapa nde pyhareve	buenos días
こんにちは	mba'éichapa nde ka'aru	buenas tardes
こんばんは	mba'échapa nde pyhare	buenas noches
ご機嫌いかがですか	mba'éicha reiko?	¿qué tal?
元気です	aiko porã	estoy bien
まあまあです	nunga lénto	más o menos
悪いです	aiko vai	estoy mal
さようなら	jajohechapeve	hasta la vista, adiós
私は日本人です	che haponegua	soy japonés(a)
私の名前は…です	che réra	mi nombre es..
あなたの名前は何ですか	mba'éicha nde réra?	¿qué es su nombre?
B　数字		
あなたは何歳ですか	mboy ary'pa rereko?	¿cuántos años tienes?
いくつですか	mbovy'pa?	¿cuántos?
何時ですか	mboy aravo?	¿qué hora es?
何曜日ですか	mba'e ara?	¿qué día es?
1	peteĩ	uno
2	mokoĩ	dos
3	mbohapy	tres
4	irundy	cuatro
5	po	cinco
6	poteĩ	seis
7	pokõi	siete
8	poapy	ocho
9	porundy	nueve
10	pa	diez
11	pateĩ	once
12	pakõi	doce
13	poapy	trece
14	parundy	catorce
15	papo	quince
16	papoteĩ	diez y seis
17	papokõi	diez y siete
18	papoapy	diez y ocho
19	paporundy	diez y nueve

20	mokõipa	veinte
21	mokõipa peteĩ	veinte y uno
22	mokõipa mokõi	veinte y dos
23	mokõipa mbohapy	veinte y tres
24	mokõipa irundy	veinte y cuatro
25	mokõipa po	veinte y cinco
30	mbohapypa	treinta
40	irundypa	cuarenta
50	popa	cincuenta
60	poteĩpa	sesenta
70	pokõipa	setenta
80	poapypa	ochenta
90	porundypa	noventa
100	sa	cien(-to)
1000	su	mil
2000	mokõi su	dos mil
1万	pasu	diez mil
10万	sasu	cien mil
1月	jasyteĩ	enero
2月	jasykõi	febrero
3月	jasyapy	marzo
4月	jasyrundy	abril
5月	jasypo	mayo
6月	jasypoteĩ	junio
7月	jasypokõi	julio
8月	jasypoapy	agosto
9月	jasyporundy	setiembre
10月	jasypa	octubre
11月	jasypateĩ	noviembre
12月	jasypakõi	diciembre
曜日	arapokoindy	los días
日曜日	arateĩ	domingo
月曜日	arakõi	lunes
火曜日	araapy	martes
水曜日	ararundy	miércoles
木曜日	arapo	jueves
金曜日	arapoteĩ	viernes
土曜日	arapokõi	sábado
休日	arapytu'u	feriado
分	aravo'ĩ	minuto
日	ára	día
1日	árapeteĩ	un día

2日	áramokõi	dos días
週	pokõi ára, arapokoindy	semana
月	jasy	mes
年	ro'y, ary, arajere, araro'y	año
今	ãga, ko'ãga, ange	ahora
今日	ko ára, kóvape	hoy día
明日	ko'ẽrõ ko'ẽramo	mañana
あさって	ko'ẽambuérõ	pasado mañana
昨日	kuehe, kurivévo	ayer
おととい	kokuehe, kueheambue	antiayer
C 非常事態		
どろぼう！	mondaha!	¡ladrón!
助けて！	ñepytyvõ!	¡auxilio!
警察署	tahachi	policía
警察を呼んで下さい	iekatupa ehenoi tahachipe	llame a la policía
警察を呼びたい	amomaranduse tahachipe	quiero llamar a la policía
日本大使館	Japonerogua guasu	Embajada de Japón
病院	hasýva róga, tasyo	hospital
病院へ行きたい	ahase hasýva rógape	quiero ir al hospital
お金（現金）	viru, pirapire	dinero
財布（お金入れ）	pirapire ryru	monedero
時計	aravopapaha	reloj
バッグ	mba'yru(vosa)	bolsa/cartera
トランク	mba'yru	maleta
救急車	hasýva mba'yrumýi	ambulancia
電話	ñe ẽha mombyry	teléfono
薬	pohã	medicina
水	y	agua
頭痛	akãrasy	dolor de cabeza
腹痛	rye rasy	dolor de estómago/barriga
熱	akãnundu	fiebre
下痢	tye	diarrea
風邪	tĩsyry	resfrío
D 道をたずねる		
ホテル	mbohupa	hospedaje(hotel)
東	kuarahyresẽ	este
西	kuarahy reike	oeste
南	ñemby	sur
北	yvate	norte
郵便局	pareha	correo
市場	ñemuha	mercado
銀行	viru roga	banco

薬局	pohã roga	farmacia
まっすぐ	karapa'y	directo
曲がること	jere, jevy	vuelta
右	terekua	derecho(-a)
左	asu	izquierdo(-a)
前	tenonde	delante
後	kupe	atrás
E　買物・郵便・乗物		
これは何ですか	mba'e pa koa?	¿qué es esto?
あれ	amóva	aquel
いくらですか	mboy pa hepy?	¿cuánto cuesta?
…はありますか	oĩ...?	¿hay ...?
高い！	hepyete!	¡qué caro!
もっと安くしてください	mboguejy mína chéve	rebaje por favor
おつり	hembýva	vuelto, sobra
ここに書いてください	ehai ápe ikaturamo	escriba aquí por favor
乗る	jupi	subir
降りる	guejy	bajar
（為替の）レート	mboy pa	costo de dinero
運賃	hasaha	pasaje, boleto, precio de boleto
タクシー	mba'yru ra'aha	taxi(omnibus etc)
飛行機	pepo'ata	avión
船	yga rata	barco
予約	ñongatupy	reservación
（鉄道の）駅	pytaha	estación
バス停	tekoha	paradero
はがき	kuatia'atã'i	tarjeta postal
手紙	kuatía'añe'ẽ	carta
F　食事		
タバコを吸う	pita	fumar
レストラン	karuha	restaurante
おいしい	he terei	delicioso
メニュー	tembi'urã réra rysýi	menú
お腹が空いています	che ñembyahýi	tengo hambre
のどが渇いています	che y'uhéi	tengo sed
ビール	kaguy	cerveza
ジュース	ry, tykue	refresco/jugo
パン	mbujape	pan
ご飯	aro, avati'i	arroz
野菜	ka'avo, ka'a, mba'e rovy	verdura
果物	yva	fruta
牛肉	so'o vaka	carne de vaca

鶏肉	ryguasu ro'o	carne de pollo
豚肉	kure ro'o	carne de cerdo
羊肉	ovecha ro'o	carne de oveja
魚	pira	pescado
甘い	he'ẽ	dulce
辛い	tái	picante
すっぱい	hái	agrio
塩辛い	he'ẽ mbochy	salado
灰皿	kusugue ryru	cenicero
ジャガイモ	yvy'a	papa, patata
トウモロコシ	avati	maíz, choclo
バナナ	pakova	plátano, banana
オレンジ	narãha	naranja
唐辛子	kumbari	ají, rocoto
カボチャ	kurapepẽ	zapallo
玉葱	sevói	cebolla
豆	kumanda	poroto
スープ	jukysy	sopa
ぶどう酒	kaguy	vino
肉料理	tembi'u so'o	comida de carne
魚料理	tembi'u pira	comida de pescado
家庭料理	tembi'u óga	comida de casa
G　ホテルで		
洗濯する	jaoréi, jaojohéi	lavar ropas
清潔な	potĩ	limpio
汚い	ky'a	sucio
静かな	py'aguapy	tranquilo
暑い	haku	hace calor
うるさい	ayvu	bullicioso
寒い	ro'y	frío
お祭り	arete	fiesta
踊り	jeroky	baile
歌	purahéi	canción
E　その他		
山	yvyty	cerro/montaña
川	ysyry	río
谷	yvyty rokái	valle, quebrada
畑	kokue	campo de cultivo
天	ara apy, yvy marae'ỹ	cielo
牧場	kokue	estancia
地（大地）	yvy, tetã	tierra
石	ita	piedra

私の父	che ru, che taita	mi padre
私の母	che sy	mi madre
私の兄（私が女性の場合）	che ryke'y	mi hermano mayor
私の妹（同上）	che kypy'y	mi hermana menor
私の弟（同上）	che kyvy	mi hermano menor
私の夫	che ména	mi marido
私の妻	che rembireko	mi esposa

後記：

この用語集の作成については、パラグアイ出身の氏家デリアさんの協力をえた。この紙面を借りて謝意を表したい。

また、日本語の選択については、下記の文献に準拠した。真島圜弘、アンヘリカ・P＝青木「日本語/ケチュア語/スペイン語旅行会話」『資料ラテンアメリカ』第30号（1995年）および『風と地図と』第10号（1994年）。